

機関番号：32665  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2007～2010  
 課題番号：19520113  
 研究課題名(和文) 美学における基礎概念の研究

研究課題名(英文) Studies on Basic Concepts in Aesthetics

## 研究代表者

佐々木 健一 (SASAKI KENICHI)  
 日本大学・文理学部・教授  
 研究者番号：80011328

研究成果の概要(和文)：研究報告書には、「モダン・ポストモダン」「ポピュラー(民衆的)」「日常性」「美術館」の4概念についての研究を収録する。それぞれについて、概念的定義を与え、歴史的な展開(事実と概念/理論)をたどり、今日の問題点を指摘している。また、「直感的・美的」「感情・情緒・感動」「感性・感受性」についての研究を継続中で、このうち、感情/感性に関する英文の論文を脱稿した。

研究成果の概要(英文)：I publish in the Scientific Report four studies on the following concepts: "Modern/Postmodern", "Popular", "Everydayness" and "(Art)Museum". On them, I give the definition, follow the historical development (facts and theories), and present their problematic aspects in our days. Besides, I have been working on "aesthetic", "feeling/emotion", "sensibility". I recently wrote an English paper on the sensibility as the faculty of feeling for the journal Diogenes.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：美学、モダン、ポストモダン、ポピュラー、日常性、美術館、国際情報交換、中国

## 1. 研究開始当初の背景

- (1) 長らく安定していた美学の様式(問題意識の在り方、主要なテーマ等々)が、激変しつつある、という事情が根底にある。この変化の意識は、日本よりも海外において強い。
- (2) 具体的には、1995年に刊行した『美学辞典』では、現状に対応しがたくなってきた。これは25の基礎概念を取り上

げたものだが、その視野は基本的に近代的である。

- (3) そこでこれを補完する1巻を企て、特に新しい分野の研究を志し、平成16～18年度に受給した科研費による研究(課題番号16520073)を継続するのが本研究である。

## 2. 研究の目的

(1) 上記の「背景」に示したように、他の分野同様、美学もまた、文明の動向を受けて激動期にあり、変革せざるを得ない状況におかれている。第一の目的は、美学の新しいすがた、その未来像を示すことである。

(2) 具体的には、上記『美学辞典』第2部を完成させたい。それが、現に議論されている新しい主題のなかで、未来に続くと思われるものについて、基礎的本質的な知識を集成することである。

### 3. 研究の方法

(1) いかなる概念が重要かの見極めが重要になる。かつてはどの美学書も共通して論じている概念があった。その視野からの言わば逸脱をもくろむ以上、この基礎概念の識別が重要課題である。雑誌の目次や、国際会議のプログラム、更には海外の研究者たちとの討論を通じて、これを探る。

(2) 概念を選択したうへは、研究方法は古典的である。広範な資料を読み、そこに示された知見を集約し、論考として書き下ろす。

### 4. 研究成果

研究報告書には、「モダン・ポストモダン」「ポピュラー（民衆的）」「日常性」「美術館」の4概念についての研究を収録する。

(1) 「モダン」すなわち近代とはルネサンス以降の時期に確立した神抜き、人間中心の文明を「新しい」ものとする人びとの自覚を表す。具体的には民主政治と人権、非永遠性と進歩、歴史的相対性などがその中核をなす。新旧論争を先駆的兆候とし、18～19世紀の変わり目頃その意識は定着する。他方「ポストモダン」は1980年代頃現れてきた変化の意識で、個性＝独創性の価値観の後退、文化の階層的区別の希薄化、画一化の進行、文化の商品化などを特徴とする。

(2) 「民衆的」文化は、それとの差別化が近代の藝術概念を成立させたもとである。否定されつつも民衆性＝民族性への意識も覚醒し、ロマン主義の1契機となった。大衆文化の伸長に対する危機意識（ニーチェ、オルテガ）にも拘わらず、科学技術の成果としての複製技術（ベンヤミン）は藝術の大衆化を圧倒的に現実化し、その積極的な価値づけの理論も現れてきている。

(3) 「日常性」はながらく文化の背景にすぎなかったが、20世紀になるとそれこそが真の現実との見方が現れてくる。シュルレアリスム、ベンヤミン、R・バルト、ルフェーブらにおいて顕著な思想であり、昨今では「日常性の美学」が衣食住の美的側面についての研究を展開している。

(4) 「美術館」は有力者の booty に由来する

コレクションを核として、フランス革命の時期に藝術の場所として各地に生まれた。その指導原理となったのは、新しい政治理念としての民族主義であり、かつ、歴史意識にもとづく展示法が開拓された。その自律的藝術観は近代美学の正統となったが、それに対する批判は古くからあり、近年の「略奪美術品」返還要求運動は、美術館の原初の在り方の問い直しでもある。

(5) この他、原稿化するに到らなかった研究継続中の概念として、「直感的・美的」「感情・情緒・感動」「感性・感受性」がある。このうち、感情と感性にまたがる主題に関する英文の論文を脱稿した。『ディオゲネス』誌のための原稿だが、本研究が歴史的であるのに対して、この論考は思索的である。この『ディオゲネス』誌の特集号は「新美学」に関するもので、わたし自身が編者で、この企画そのものが本研究の成果と言える。わたしの論文を含め16篇が収録され、今年中に英語、フランス語で刊行される予定である。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計11件)

① 佐々木健一「遠近法の東西——日本の空間感覚」、『國華』、1380号、pp. 7-21、2010、査読有。

② Ken-ichi Sasaki, “L’ ’ Esprit’ en ancien japonais”, *Dogène*, No. 227, pp. 3-25, 2010, 査読有。

③ Ken-ichi Sasaki, “Une phrase de Valéry lue/vue au miroir du mot japonais kage”, in: Givonna A. Massari (ed.), *Tempo Forma Immagine dell’Architettura*, scritti in onore di Vittorio Ugo, pp. 187-195, 2010, 査読無。

④ 佐々木健一「ディドロにおける美の形而上学（下の後篇）——『絵画論』第七章とその原点」、『精神科学』第48号、pp. 1-24, 2010, 査読有。

⑤ 佐々木健一「美のポリティックス」、『哲学雑誌』第796号、pp. 101-131, 2009。

⑥ 佐々木健一「ディドロにおける美の形而上学（下の前篇）——『絵画論』第七章とその原点——」、『精神科学』第47号、pp. 17-36, 2009, 査読有。

⑦ 佐々木健一「進歩史観から脱却し「美」「感性」を価値観の中心に据える」、『商工につぼん』、第 740 号, pp. 52-55, 2009, 査読有.

⑧ Ken-ichi Sasaki, “Eros, Beauty and Ugliness”, The Nordic Journal of Aesthetics, No. 35, pp. 75-92, 2008, 査読有.

⑨ Ken-ichi Sasaki, “A Silent Rhetoric: ‘Change’ and Its Back Mechanism”, Contemporary Aesthetics (<http://www.contempaesthetics.org/newvolume/pages/article.php?articleID=513>), No. 6, 2008, 査読有.

⑩ 佐々木健一「デイドロにおける美の形而上学(中)——『絵画論』第7章とその原点——)、『精神科学』第46号, pp. 23-50, 2008, 査読有.

⑪ Ken-ichi Sasaki, “The Structure of Cityscape Beauty”, in: POREIA, A Festschrift for Professor Dionysis A. Zivas, pp. 556-561, 2007, 査読無.

[学会発表] (計12件)

① 佐々木健一「さくらとバラ——日本的感性の構造」、オリエンズ・セミナー、オリエンズ宗教研究所、2011/02/25.

② Ken-ichi Sasaki, “The Philosophical Role of Aesthetics”, the XVIIIth International Congress of Aesthetics, Peking University, 2010/8/12.

③ Ken-ichi Sasaki, “The Japanese Sense of Space; the Perspective in the East and West” University of Trento, 2010/02/18.

④ Ken-ichi Sasaki, “The Japanese Sense of Space; the Perspective in the East and West”, Special lecture on aesthetics, University of Trento, 2010/02/18.

⑤ 佐々木健一「かぜの詩学」美学会東部会例会、東京大学、2009/03/07

⑥ Ken-ichi Sasaki, “Perspective in the East and the West”, Institute of Oriental Studies, Vilnius University, 2008/10/22.

⑦ Ken-ichi Sasaki, “Perspective in the

East and the West”, The International Conference —Practical Reason and Life-World, University of Latvia, 2008/10/16.

⑧ Ken-ichi Sasaki, “Perspective in the East and the West”, Estonian Academy of Arts, Estonian Academy, 2008/10/13, (Special Lecture).

⑨ 佐々木健一「遠近法の東西—風景画と山水画—」、関西大学東京センター公開講座《風景との出会い—近代の時空をめぐる—》、2008/10/04.

⑩ 佐々木健一「バロックの美意識」、日韓若手音楽家交流コンサート、日本大学カザルスホール、2008/08/29.

⑪ 佐々木健一「バロックから古典へ」、草津音楽祭、2008/08/20.

⑫ Ken-ichi Sasaki “Politics of Beauty”, The XXIth World Congress of Philosophy, at the Seoul National University. 2008/07/31

[図書] (計6件)

① 佐々木健一『日本的感性——触覚とずらしの構造』、中央公論新社、308pp. 2010.

② 佐々木健一他『未来コンパス』、担当箇所:「藝術概念の誕生と変遷」、pp. 182-193. 水曜社、2010.

③ Ken-ichi Sasaki (ed.), *Asian Aesthetics*, Kyoto University Press, 324pp. 2010.

④ 佐々木健一・田中裕二・太田光 (共著)『人類の希望は美美美』(爆笑問題のニッポンの教養) 講談社、140pp. 2008.

⑤ L’Autre de l’oeuvre (ed. by Y. Nakaji), Presse Universitaire de Versailles, 担当箇所: Ken-ichi Sasaki “Le Coulant sous-jascent: le cas de Jean Giraudoux”, pp. 225-35, 2007.

⑥ 佐々木健一他『哲学の歴史』第6巻、担当箇所:「デイドロ／ダランベール」、pp. 485-533, 中央公論新社、2007.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木健一 (SASAKI KENICHI)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号 : 80011328

(2)研究分担者  
なし

(3)連携研究者  
なし